

琉球大学学術リポジトリ

指導条件の違いがスキル・態度面に及ぼす影響：
児童英検の結果を踏まえて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2015-11-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, 賢, 宮里, 征吾, 石川, 瑞起, 浜田, 麻由子, Oshiro, Ken, Miyazato, Seigo, Ishikawa, Mizuki, Hamada, Mayuko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32317

指導条件の違いがスキル・態度面に及ぼす影響

～児童英検の結果を踏まえて～

大城賢* 宮里征吾** 石川瑞起*** 浜田麻由子****

A Study of Elementary School English Education Based on the Data Analysis of *Jido-Eiken* and the Questioner

1. 研究の目的

平成23年度より外国語活動が必修化された。多くの学校で、第5～6学年で外国語活動が週1時間実施されている。一方、学校によっては学校裁量の時間を活用したり、英語教育特区申請を行ったりして、低学年や中学年から実施しているところもある。公益財団法人日本英語検定協会が平成24年12月に行った全国の小学校（国公立）から抽出した5,207校を対象にしたアンケート調査によると、第5～6学年において週1時間（年間23～35時間）の外国語活動を実施している学校はそれぞれ82.4%、82.0%となっている。一方、週2時間（年間36～70時間）はそれぞれ12.6%、12.8%である。第1～4学年においては、年間4～11時間程度を実施している学校がもっとも多く、第1学年（27.7%）、第2学年（28.8%）、第3学年（27.0%）、第4学年（27.5%）である。第1学年から週1時間（23～35時間）実施している学校も数は少ないものの、第1学年（3.3%）、第2学年（3.3%）、第3学年（6.8%）、第4学年（7.1%）である。¹

さて、平成25年5月に出された教育再生実行

* 琉球大学、

** 那覇市立石田中学校

*** 琉球大学大学院

**** 公益財団法人日本英語検定協会

¹ 公益財団法人日本英語検定協会・英語教育研究センター「小学校の外国語活動および英語活動等に関する現状調査」平成25年3月

会議の報告書を見ると日本における英語教育の抜本的改革が提言されており、小学校の英語教育については実施時間の増大や開始学年の低学年化が検討課題として上がっている²。提言の方向へ進むのかどうかは現在のところ全く分からないが、学習指導要領の次の改定に向けて、いよいよ本格的な議論が始まっていくものと思われる。

次の学習指導要領を検討するためには、これまでの成果と課題を客観的に検討することが大切である。そこで、本研究では、指導条件（時間数、開始学年）などの違いが、児童のスキル面・態度面に、どのような影響を与えているかを、公益財団法人英語検定協会の児童英検（GOLD）及びそれに付随しているアンケートをもとに検討する。

2. 研究の方法

(1) 使用したテストについて

今回の調査にあたり、公益財団法人英語検定協会の児童英検を使用した。児童英検は学習経験や学習状況を基準に3つのグレードが設定されている。学習経験で見ると、小学校での英語活動が1年半から2年程度がBRONZE、2年半～3年半程度がSILVER、4年～5年程度がGOLDとなっている。文字の学習においてはBRONZEが学習経験なし、SILVERが1年～2年程度、GOLDが2年半～3年程度となっている。本研究の対象となっている児童は文字指導が全くない

² 「これからの大学教育等の在り方について－第3次素案」平成25年5月

グループと文字指導を5～6年で2年間実施しているグループに分けられる。本来ならば両グループともSILVERで受験するのが適切かもしれない。しかし、SILVERでは易しすぎて天井効果が表れる可能性もあり、GOLDを使用することにした。

GOLDの概要は以下のとおりである。

小問数 50問

テスト時間 50分

<到達目標>

- ① 日常生活において身近な事柄に関する語句や表現を聞き、理解する。それに対して質問したり応答したりする。
- ② まとまった会話や文章に聞き、その中の情報を理解し、その場面状況を判断する。
- ③ 身の回りの語句や簡単に短い文を読む。

<出題のねらい>

語句：いろいろな文の中で語句の聞き取り

会話：まとまった会話（3往復以上）の聞き取り

文章：5W 1Hによる疑問文の応答・質問文の投げかけ

文字：基本的な語句や簡単に短い文の認識

<主な言語材料>

語彙分野：

- ① 程度や数量に関することば、職業や海外、旅行先で必要なもの
- ② 自然環境、身近な社会生活に関するもの、日本や外国の文化に関するもの

<ことばのはたらき>

個人的印象、感情伝達、自分の考えなど

(2) 研究参加者について

沖縄県内のA市とB市の6年生の児童を対象とした（参加者総数658人）。両市の外国語活動の概要は以下の通りである。

A市の現在の授業時数は1～4年生が週1時間（年間34～35時間）、5～6年生が週2時間（年間70時間）である。しかし、平成22年度までは3～4年生も週2時間（年間70時間）であったため、対象となった6年生（平成24年度）は1～2年までは35時間、3～6年までは70時間で授業時数は総計で350時間である。

一方、B市の授業時数は1年生（年間9時間）、2年生（年間10時間）、3年生（年間30時間）、4年生（年間30時間）、5年生（年間35時間）、6年生（年間35時間）で、対象となった児童の総時数は149時間である。

両市のカリキュラムを比較したところ、内容面での大きな異なりは確認されない。ただし、文字指導については、A市においては5～6年でフォニックスの指導を一部取り入れた指導を行っているが、B市においては文字に関する積極的な指導はしていない。指導者については、両市ともHRTが主導し、JTE（またはALT）とのチームティーチングの形態をとっている。

A市とB市における調査対象児童の指導条件の概要をまとめると表1のようになる。

<表1>

	授業時数						総時数	指導者	その他
A市	34	35	70	70	70	70	350	HRTとJTE/ALT	5,6年で文字
B市	9	10	30	30	35	35	149	HRTとJTE/ALT	文字指導なし

3. 結果

両市の結果を平均点、テスト項目ごとの比較、態度面とスキルの相関、問題ごとの正答率、態度面の比較から検討する。

(1) 平均点

A市とB市との間で平均値の差に関するt検定を行った結果、統計的な有意な差が認められた(t=5.593, df=655.528, p<.01)。時間数の差が両群の成績の差となって現れている。また、標準偏差を見ると両群には大きな差は認められない。一般

的に学習経験（この場合は時間数の差）が長くなると成績にばらつきが出る傾向があるが、今回の

結果には、その傾向が見られない。（表2参照）

<表2>

因子A	N	平均	標準偏差(SD)	平均-SD	平均+SD	標準誤差(SE)	平均-SE	平均+SE
A市	341	64.111	14.855	49.257	78.966	0.804	63.307	64.916
B市	317	57.779	14.183	43.596	71.962	0.797	56.983	58.576

(2) テスト項目

A市とB市の基本統計量は以下のとおりである。

<語句>

<会話>

	n	平均	不偏分散	標準偏差
A市	341	66.384	272.373	16.504
B市	317	56.631	310.677	17.626

	n	平均	不偏分散	標準偏差
A市	317	54.612	412.865	20.319
B市	341	62.202	381.021	19.520

<文字>

<文章>

	n	平均	不偏分散	標準偏差
A市	341	64.346	608.950	24.677
B市	317	60.820	524.642	22.905

	n	平均	不偏分散	標準偏差
A市	341	62.088	270.804	16.456
B市	317	57.498	261.441	16.169

t検定の結果

	総計量：t	自由度	両側P値	片側P値	検出力 (α = 0.05・両側)
語句	7.330	656	0.0000	0.0000	1.0000
会話	-4.887	656	0.0000	0.0000	0.9982
文字	1.896	656	0.0584	0.0292	0.4733
文章	3.605	656	0.0003	0.0002	0.9495

A市とB市との間でテスト項目ごとの平均値の差に関するt検定を行った。語句に関しては統計的な有意な差が認められた (t=7.313, df=643.635, p<.01)。会話に関しても、統計的な有意な差が認められた (t=-4.879, df=647.710,

p<.01)。文字に関しては統計的な有意な差は認められなかったが、有意傾向があることがわかった (t=1.901, df=655.999, p = .0578)。文章に関しては統計的な有意な差が認められた (t=3.607, df=653.984, p<.01)。

(3) 態度面とスキルの相関

アンケートの質問³の(1)～(8)までを点数化した。積極的な態度(好ましい態度)を4点とし、その逆を1点とした。例えば「外国人の先生や担任の先生の英語を聞くことは楽しいですか」という質問に対して①とても楽しい=4点、②楽しい=3点、③あまり楽しくない=2点、④楽しくない=1点とした。

児童英検を受験した両市の研究参加者の成績とアンケートの得点の関係をピアソンの相関係数で

調べた。A市の結果は $r=0.4229$ であり、無相関の検定は $p<0.01$ で有意であった。以上のことからA市における得点と態度の間には「中程度の相関があることが分かった。(表3参照)

B市の結果は $r=0.2777$ であり、無相関の検定は $p<0.01$ で有意であった。以上のことからB市における得点と態度の間には「弱い相関があることが分かった。この結果は成績が高ければ高いほど態度面でもポジティブな態度の児童が多いことを示している。(表4参照)

A市

相関行列

	情意合計	今回正答率
情意合計	1.0000	0.4229
今回正答率	0.4229	1.0000

母相関係数の無相関の検定 [上三角: P値/下三角: 判定 (**:1%有意, *:5%有意)]

	情意合計	今回正答率
情意合計	-	0.0000
今回正答率	**	-

B市

相関行列

	今回正答率	情意合計
今回正答率	1.0000	0.2777
情意合計	0.2777	1.0000

母相関係数の無相関の検定 [上三角: P値/下三角: 判定 (**:1%有意, *:5%有意)]

	今回正答率	情意合計
今回正答率	-	0.0000
情意合計	**	-

³ 児童英検(GOLD)に付いているアンケート。内容については資料1を参照。

表3 テストと態度の相関 (A市)

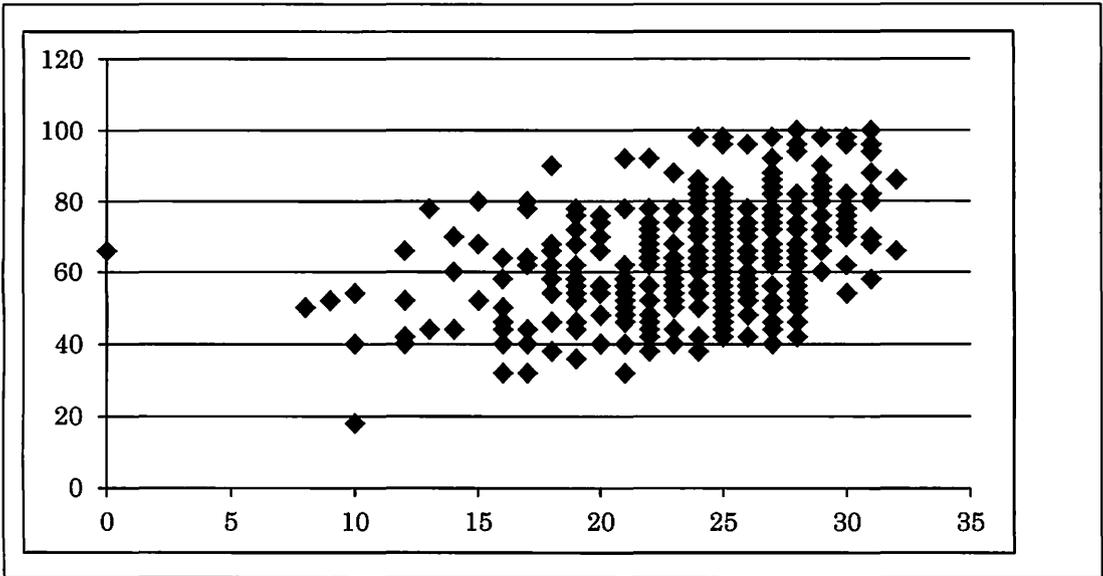
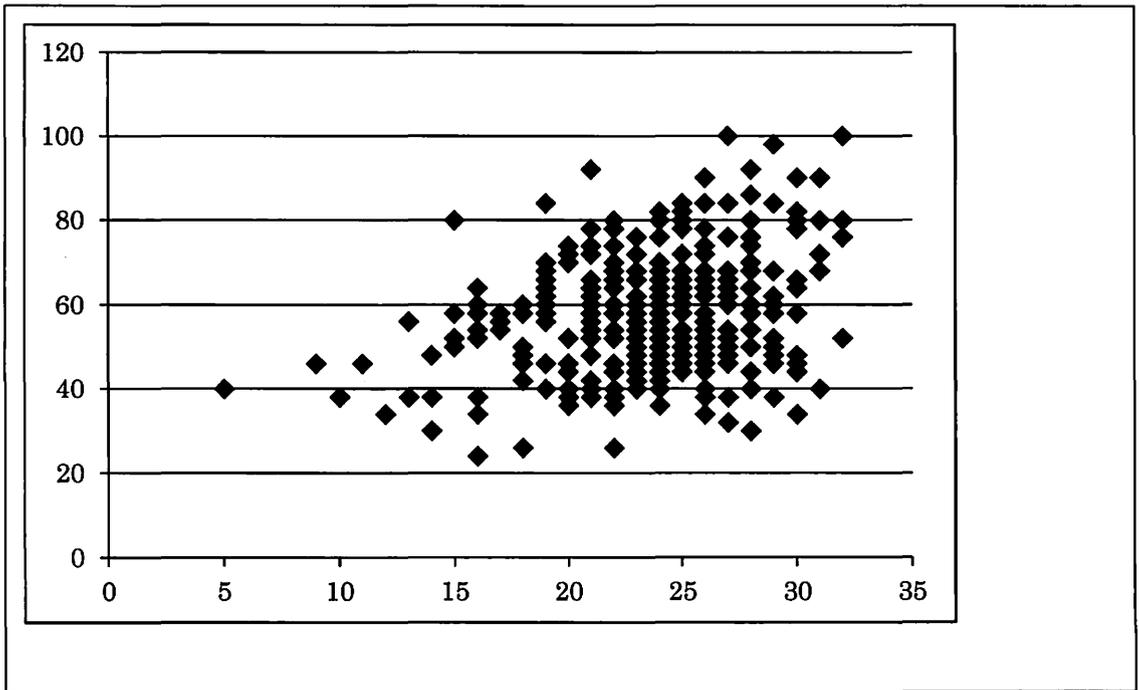


表4 テストと態度の相関 (B市)

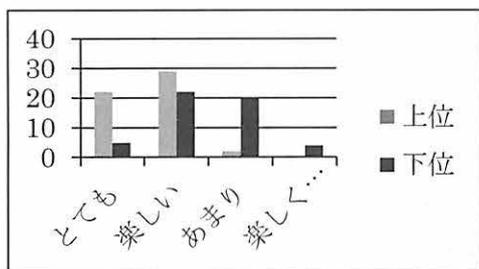


(4) 成績上位群と下位群の態度面の特性

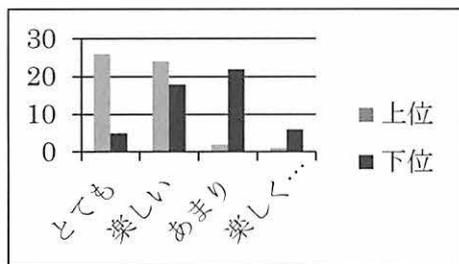
前述したように、成績と態度面においてA市の場合は中程度の相関があることが分かった($r=0.4229$)。そこで、成績上位群と下位群には態度面でどのような特徴があるかをA市の場合で考察する。成績上位群は平均点(64.1)に標準偏差(14.9)を足した点数(79)をカットポイントとした。上位群は53名となった。下位群は同じく平均点(64.1)に標準偏差(14.9)を引いた点数(49)をカットポイントと設定した。人数は51名となった。アンケートの結果を「楽しさ」「意欲」「理解」「興味・関心」「文字」「もっとしたいこと」に分けて項目毎の人数を合計したのが以下の結果である。

<楽しさ>

①外国人の先生や担任の先生の英語を聞くことは楽しいですか

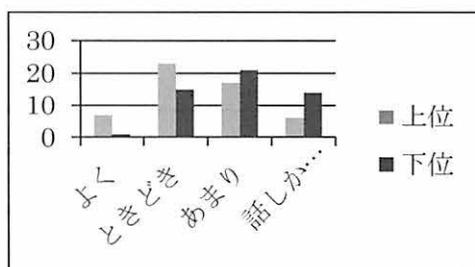


②英語を話すことは楽しいですか?

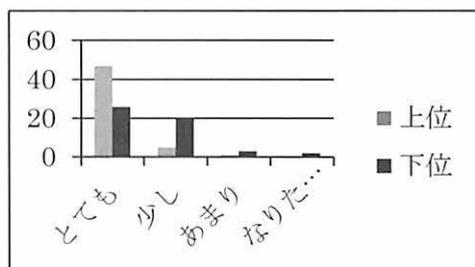


<意欲>

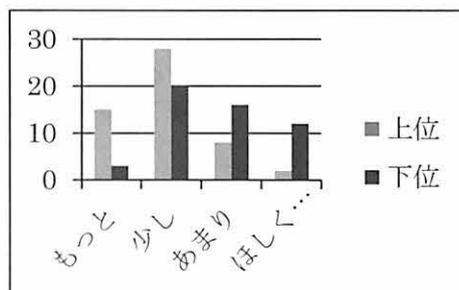
③だれかに英語で話しかけてみることはありますか?



④もっと英語を話せるようになりたいですか。

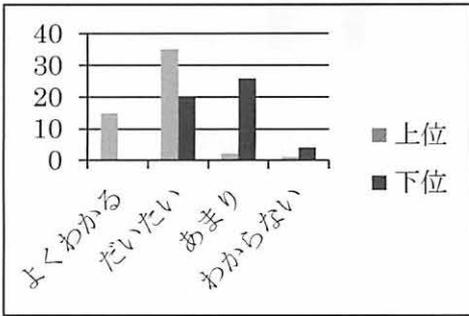


⑤英語の授業をもっと増やして欲しいですか?



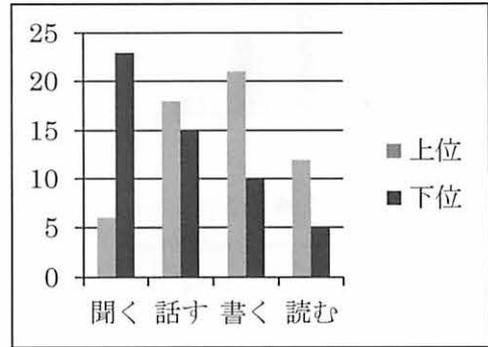
<理解>

⑥外国人の先生や担任の先生の話している英語の意味がわかりますか？



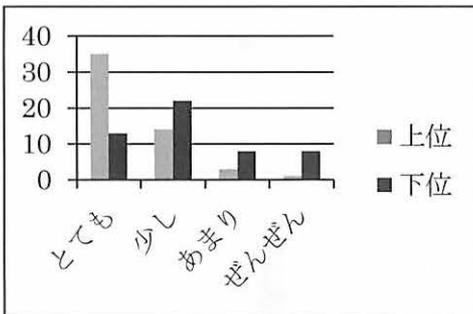
<授業でもっとしたいこと>

⑨英語の授業でもっとしたいことは何ですか？



<興味・関心>

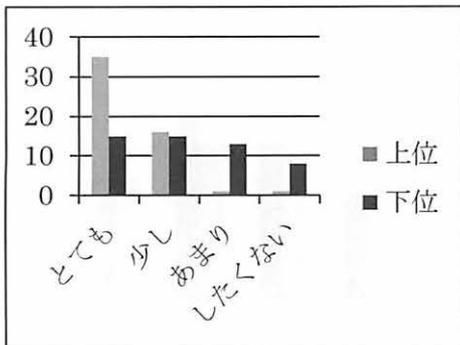
⑦外国のことに興味がありますか？



A市の場合は成績と態度面において中程度の相関があることは前述した。上位群と下位群に分けると態度面の特性が明確に表れてくる。上位群は「楽しさ」「意欲」「理解」「興味・関心」などで下位群を大きく上回っている。文字を読んでみたいという項目では上位群のほうが圧倒的に多い。「授業でもっとしたいことは何ですか」の質問では下位群のほうは「聞く」のほうが多いが、上位群では「書く」のほうが多かった。B市においても、この傾向は同様であった。

<文字>

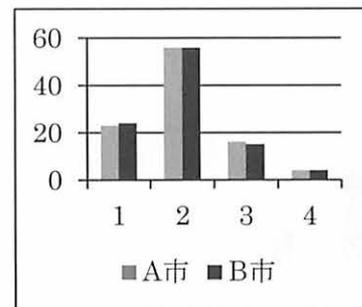
⑧英語の文字を読んでみたいですか？



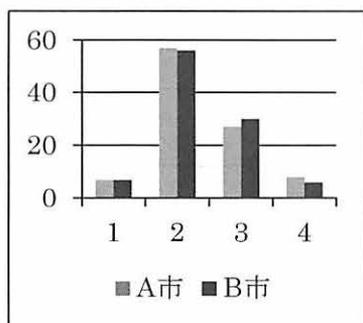
(5) A市とB市の態度面の比較

最後に、アンケートの項目ごとにA市とB市を比較した結果を紹介する。(1=とても、2=まあ、3=あまり 4=まったく～でない)

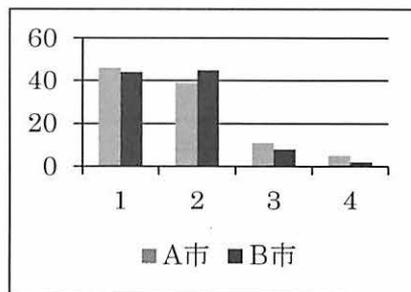
①英語を聞くことは楽しいですか。



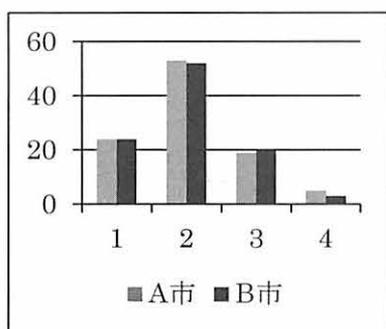
②話している英語の意味が分かりますか。



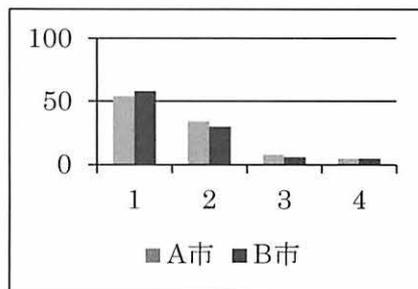
⑥外国のことに興味がありますか。



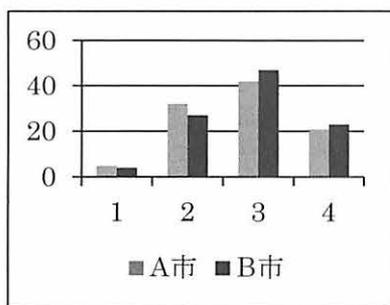
③英語を話すことは楽しいですか。



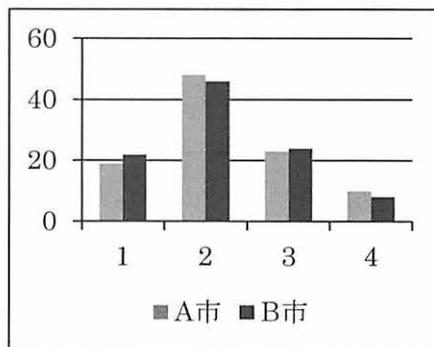
⑦文字を読んでみたいですか。



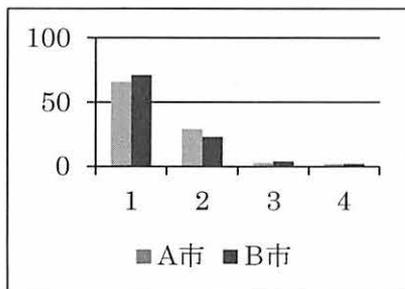
④英語で話しかけてみることはありますか。



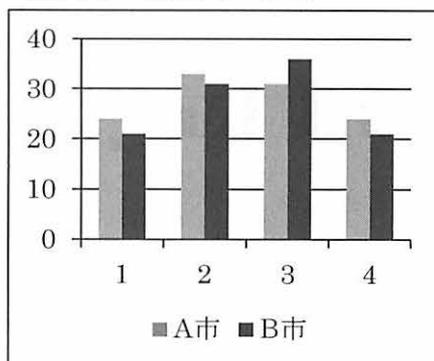
⑧授業時数を増やして欲しいですか。



⑤もっと話せるようになりたいですか。



⑨もっとしたいことは何ですか。(1 = 聞く、2 = 話す、3 = 読む、4 = 書く)



この結果を見ると、A市とB市において、指導時数などの違いはあるものの、態度面の差はほとんどないことが分かる。A市は時間数も多く、スキル面ではB市を上回っている。しかし、「英語を聞くことは楽しい」、「英語を話すことは楽しい」、「もっと話せるようになりたい」、「授業時数を増やしてほしい」など、B市とほとんど同じ傾向を示している。時間数を増やしたからと言って、態度面の影響には差がないことが示唆された。

4. 結論

1年生から6年生までの総時数の異なるA市(350時間)とB市(149時間)の児童を対象に児童英検とアンケートを使い、スキル面と態度面の比較を行った。

当然と言えば当然かもしれないが、時間数の多いA市のほうがスキル面(語句、会話、文章)ではB市よりも有意に高いことが分かった。ただし、文字に関しては有意差がなく、有意傾向があることが示された。

態度面との相関をみるとA市のほうがB市にくらべるとスキルと態度の相関が高い。つまり、スキルが高ければ高いほど好ましい態度が育成されていると考えることができる。

時間数が少なく、スキル面でA市よりも平均点が有意に低かったB市においては、スキル面と態度面の相関がA市と比べると低かった。これは、スキルは高いが好ましい態度が育っていない可能性や、逆に好ましい態度は育成されているが、スキルに直接影響していない可能性があることを示唆している。この事は、A市における上位群と下位群の比較においても顕著であり、上位群のほうが好ましい態度が育成されている。文字に関する興味・関心も上位群のほうが圧倒的に高いことが分かった。

両群の標準偏差を見ると両群には大きな差は認められない。前述したように、一般的に学習経験(この場合は時間数の差)が長くなると成績にばらつきが出る傾向があるが、今回の結果には、その傾向が見られなかった。

また、アンケートの結果を単純に比較してみるとA市とB市にはほとんど差が見られない。授

業時数を増やし、スキルが結果的に高くなったグループだからといって、英語嫌いが増えたとか、興味・関心・意欲が低くなった、ということにはなかったということが示唆された。

これらの結果をみると、指導時間数を増やすことに対する態度面でのマイナスの影響は全くみられないことがわかった。

5. 今後の課題

今回は授業時数の異なる2つのグループを児童英検とアンケートによって比べてみた。実際にどのような授業が展開されているかについては詳しく調査することができなかった。英語に対する態度は授業者の指導技術に大きく影響される。しかし、そのことは無視した分析になっている。

両群とも公立の学校であり、特区申請を行い1年生から授業を行っている。対象となったクラスはA市とB市で6クラスである。この6クラスが、過去6年間にわたってどのような指導者によって、どのような授業がなされたかを調査することは極めて難しい。したがって、本研究は、異なる点は授業時数だけであると仮定した分析結果であることを前提としている。この点は、今後はさらに長期的な分析や聞き取り調査などを行う必要があると考えている。

また、今回は両グループとも特区申請を行い、1年生から授業を行っているグループである。全国的に見ると、5～6年生で週1時間、2年間で70時間の外国語活動を実施しているところが圧倒的に多い。しかし、本研究では、このグループとの比較は行っていない。今後は、さらに5～6年で週1時間程度の外国語活動を行っているグループとの比較研究が必要と思われる。

付記：本研究は公益財団法人日本英語検定協会の受託研究(児童英語検定及び英語能力判定テストを利用した児童・生徒の英語力及び態度面の関連に関する研究)を受けて行ったものである。記して深く感謝の意を表したい。

【引用文献】

教育再生実行会議(2013)「これからの大学教育

等の在り方について - 第 3 次素案」
公益財団法人日本英語検定協会・英語教育研究セ

ンター (2013) 「小学校の外国語活動及び英
語活動に関する現状調査」